

お宝拝見！ ②ランバス一家の通訳鈴木愿太とその家族



仙台市上杉山通りの自宅にて 一昭和初年頃（斎藤潔さん所蔵）

一三子 日郎 一郎 愿太 幸郎 七郎 篤郎

道子 菊井 登和子 美和子 英郎 〈敬称略〉

アメリカ南メソヂスト監督教会の日本伝道開始に当たり、J. W. ランバスは上海で知り合った日本人、鈴木愿太(1865-1945)に日本への同行を求めました。仙台出身の愿太は、上海から宣教師団と共に神戸に到着し、ランバス一家の瀬戸内伝道を支え、同教会初の日本人受洗者となり、アメリカに留学しました。帰国後、短期間ながら関西学院で教えたこともあります。

そんな愿太の生涯を『関西学院史紀要』第12号(2006年)で紹介したところ、仙台で一家と家族同様のおつきあいをされていた斎藤潔さんからお電話を頂戴しました。仙台での愿太に関しては不明な点が多かったため、仙台在住の斎藤さんからの情報は大変ありがたいものでした。



愿太は、神戸女学院で学ぶ大河平菊井と神戸で結婚し、子宝に恵まれました。この写真は、愿太夫婦とその子どもたちです。嬉しいことに、四男の七郎さん(写真左、間もなく99歳)がご健在で、お目にかかることができました。出征された七郎さんが2年間のシベリヤ抑留生活を終え帰還すると、父の愿太は疎開先で、2人の弟は戦地で既に亡くなっていました。七郎さんの収容所には、踊る指揮者としてのちに一世を風靡したスマイリー小原がいて、苦労を共にされたそうです(東京で再会された話もうかがいました)。お父様のもとには様々な人が訪ねて来たそうですが、「御免」と玄関で声をかける和服姿の土井晚翠のことを覚えておられました。また、従兄弟に当たるサトウハチロー兄弟のことも語ってくださいました。

仙台市太白区にお住まいの七郎さんを私がお訪ねしたのは、奇しくも「死を以ってしても猶、断つ可らざる情誼をもって結ばれたり」と愿太が語った W. R. ランバスの 89 回目の命日でした。

～ 仙台での調査にご協力くださった鈴木七郎さん、斎藤潔さんに心よりお礼申し上げます。～

〔学院史編纂室 池田裕子〕

★このような歴史的資料(書簡、写真、図書、器物等)をお持ちの方は、学院史編纂室までご一報ください。

学院史編纂室便り No. 32 (2010年12月15日)

関西学院学院史編纂室

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<http://www.kwansei.ac.jp/gakuinshi/ARCHIVES.htm>